

「主のみこころ」

エペソ人への手紙 5 : 17

March.9.2025

エペソ人への手紙 5 : 17 (パウロ)

Preface

まだクリスチャンではなかった高校2年生の大晦日の寒い夜に、東京文京区にある湯島天神に友達と一緒に去了。ました。

目的がありました。

湯島天神は、受験の神とされるものを祀っている有名な神社ですが、その年の湯島天神には「落ちないりんご」というりんごが売っていました。

大きな台風によって、壊滅的な被害を受けた青森のりんご農園で、物凄暴風の中地面に落ちることなく木に繋がり続けていたりんごを「落ちないりんご」と銘打って、「それを食べれば受験に落ちることはなく、志望校に合格できる」というご利益のある縁起物として、一つ1500円だったか、2000円という高い値段で売っていました。

ところが、湯島天神に行って、いざその落ちないりんごを目の当たりにしますと、何だか馬鹿らしく思ってしまったのか、買いたい気持ちが無くなってしまいました。

迷信じみたものに対する嫌悪感だったのか、または、単純にお金もつたないと思ったのかはつきり覚えていないのですが、いずれにしろ、私の心が、運命や運勢、または迷信やご利益や縁起と言われるようなものに捕らわれていたように思います。

何だか良く分からないけれども、神を装った神じみた目に見えない力に頼りたいんだか縛られていたんだか、そういうものに恐怖心のようなものを抱きながら、「その神じみたもののところを逆なでしないで、自分の進みたい道をぜひ開いてもらいたい」という祈願の気持ちを持っていたのは確かだと思います。

りんご農園の助けとなるために、普通にりんごを買うことは、それはそれで良いことだと思いますが、今考えますと、そういう縁起物を買わなかったことも、まだ本当の神さまを知らなかった私へのイエス様の守りだったのかなあと思います。

Part One

人の運命や運勢や暮らしを左右するとされる迷信じみた人の作った宗教や宗教観と、まことの神を信じるキリスト教を比較するというところに、そんなに大きな意味があるとは思いませんが、敢えて比較するならば、迷信は、人の恐れに付け込み、運命や運勢というもので縛り、お守りや縁起物やお祓いや呪文じみた言葉を唱えることによって、無心に何かを祀り立て上げることに心を掻き

立てるようなものだと言えるでしょう。

一方、キリスト教は、神の言葉と礼拝の宗教と言えるように思います。

つまり、人格の行き交い、神と人との関係構築がキリスト教です。

神々と言われるものに、何かを献げたり願い事をするような事を迷信と言う以上に、聖書は、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない。彼らが献げる物は、神ではなく悪霊に献げられている。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません」（I コリ 10：20）と言います。

天照大神からトイレの神、小さな仏像や神棚、または自分の中にある神以上のものそのすべての実体は、神ではない、神とは真逆のものだと言います。

この迷信の神々、悪霊は、私たち人間を自らの奴隷とするために、勝手気ままに運命とか運勢とかというもので、人をぎゅうぎゅうに束縛してきます。

運命や運勢を変えるために、「お守りや護符を買いなさい、縁起物を身に付けなさい、お祓いをしなさい、経や念仏のような言葉を唱えなさい、祭りなどの行事・神事を守らないと不幸が訪れますよ、不運に見舞われますよ、厄を払えませぬよ、村八分になりますよ、大変なことになりますよ」と、ほぼ恐喝と言っていいかもしれないことをしてきます。

そんな霊的恐喝を受けますと、人は恐れを抱くので、それらのことに身も心も自然と縛られて行き、伝統や文化と言う名目の下、その束縛を当たり前のように受け入れるよう迫られます。

やがてそれが、その人のうちで世界観となり、それらを守れば運勢も良くなり、商売も繁盛し、厄も払え、良い暮らしが出来るという迷信で、心をたましいを支配しようとしします。

ですので、それらの迷信的な宗教や宗教観の最も大きな特徴は、不自由と言えるでしょう。 自由がないということです。

引越しをする時も、日取りが大事になってきます。

いつでも引っ越しをして良いわけではありません。

引越しをしてはいけない日があります。

仏滅の日は縁起が悪いので、大安の日には引っ越しをしなければなりません。

どの方角に引っ越しをすればいいのかをアドバイスしてくれる、人占ってくれる人のところに行って尋ねる必要がありますし、お守りや縁起物を買って、飾り、身に付け、引っ越した先では、物をどこに置き、どんな色使いをするのが、運勢が開けたり閉じたりするのか、風水も気にしなければなりません。

結局全部、お金に関わることであり、お金が、お金で解決しようとしします。

実際に、引っ越し業者の引っ越し費用は、大安の日の引っ越し費用が高く設定され、仏滅の日は安く設定されているということを、牧師館に引っ越してく

る時に初めて知りました。

もちろん私たち家族は、いつの日でも良いですので、敢えて仏滅の日を選んで、より安い費用で牧師館に引っ越してきました。

仏滅、「仏と言われる悪霊が滅びる日」と解釈するならば、仏滅は、むしろ嬉しい日になります。

牧師館に入ってから家具のレイアウトも、自由にしたいようにしていますし、イエス様を信じるクリスチャンたちは、いつ引っ越してしても、どの方角に行っても、どんなレイアウトにしても構いません。自由です。

キリスト教で最も大事な価値は、自由です。

「真理はあなたがたを自由にします」とイエス様仰いましたが、真理であるイエス様は、私たちに自由にして下さいます。

厄年だって、不運だって、不幸だって、仏滅だって、失敗だって、それすべてが、主イエス・キリストにあっては機会となります。

チャンスです。

前回見ました通り、「機会を十分に活かさない」という御言葉通りです。

エペソ 5 : 15 - 16 (パワポ)

知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、機会を十分に活かさない。悪い時代だからです。

ここでの「知恵のない」という言葉と「悪い時代」という言葉は、同義語のような意味合いがあると思いますが、その意味は、「神ならぬものに縛られてしまうこと」、「神ならぬものに縛られている世界」ということになるでしょう。

私たちは、どこに行ったってかまいません。

「わたしはあなたに命じたのではない。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたが行くところどこでも、あなたの神、主があなたとともにおられるのだから」(ヨシュア記 1 : 9) と言って下さっている通り、私たちは自由です。

見えない神のかたちであられ、神と言われるお方の満ち満ちたご性質が形をとって宿っている主イエス様を信じた者が得る自由、与えられる自由、回復した自由です。

人がなぜ不自由を覚えるのかと言いますと、まことの神を失った、忘れた、知らない、信じない、イエス様とともにいないからです。

神様が私たちに望まれ、期待し、「こうあって欲しい」と思っておられる「主のみこころ」は、お祓いでもなく、運勢や運命でもなく、日を選ぶことでもなく、験を担ぐことでもなく、私たちの存在そのものです。

私たちの存在そのものが機会であることを悟りながら生きること。

どんな運命、どんな運勢、どんな日、どんなところにあっても、私という存

在そのものが、あなたという存在そのものが、神が与えて下さった唯一無二の機会であることを覚えながら生きること。

神の言葉を大切にすることが私という人を大切にすることであり、神の言葉に従って生きようとするのが自由であり、主イエス様を礼拝し主イエス様を信じ愛することが、種々雑多な迷信に縛られないことであり、結果的に、この世が存在してからずっと変わることのない根本的な問題であり、解決でもある人を愛するということに繋がる、これが主の願っておられること、「主のみこころだ」ということが、聖書の全てに書いてあるように思います。

Part Two

クリスチャンならば、「主のみこころは何なのか？」ということを知ることが良くあると思いますが、そのみこころを問う時の「みこころ」とは、自分の中で何を意味し、何を具体的に期待しているのでしょうか？

「この学校とあの学校どっちに行くことが、主のみこころなのだろうか？」

「この会社とあの会社どっちに進むことが、主のみこころなのだろうか？」

「この人とあの人どちらを選ぶことが、主のみこころなのだろうか？」と問うようなことがあると思いますが、その時の「主のみこころ」という言葉に込めている思いは何でしょう？

「どっちを選んだら、運命運勢が開けるのだろうか？」、「どっちに進めばよりご利益があるのだろうか？」、「どっちを取る方が、よりお金持ちになれるのだろうか？」という迷信じみた選択の思いを込めて願っていることが、少なくないように思います。

もちろん、より良い環境とか、条件とかも色々あると思いますが、主なる神さまは、環境や条件へのこだわりは全くと言っていい程、無いように見受けられます。

イエス様ご自身、環境や条件という選択、または運命や運勢ということから考えたならば、最弱、最悪、最低だったところにお生まれになりました。

そして、そういうところを生きられました。

その中でイエス様が、一貫してこだわり貫き通されることが、「主のみこころ」でした。

私たちに教えたかったこと、知って欲しいと思われたことが、「主のみこころ」でした。

(パワポ)

わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままになさってください。

(マタイの福音書 26 : 39)

わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。(ヨハネの福音書 4 : 34)

わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです。(ヨハネの福音書6：38)

イエス様が、どこにあってもなそうとされたのが、主のみこころでした。

イエス様はただ一度も、「あっちに行きこっちに行き、あっちを選びこっちを選び、あれを手に入れこれを手に入れ」という運勢や運命や縁起が開けるような意味合いで、「主のみこころ」という言葉をお使いになったためしはありませんでした。

条件や環境という面においてさらに言うならば、イスラエルの民たちが救われ、導かれて行ったのは荒野でした。

4000年前当時、この地球上で、人が文明的な暮らしをする上で、最も整い、最も優れ、最もいい環境条件のところ、世界四大文明の最初であったエジプト文明を誇るエジプトでした。

イスラエルの民たちは最高の条件と環境の中にいましたので、神さまはただ、彼らを奴隷の身分から解放してエジプトに留まらせれば、彼らの考える運命や運勢や縁起が開けるような、望むような生活が出来たかもしれませんが、神さまは、彼らに、「エジプトを出て、三日の道のりを進み、何もない、最悪、最弱、最低の環境条件である荒野に行って生活しなさい」と仰せになりながら、導いて行かれました。

そこに行くのか行かないのかということ以上に、その行った先で、「主のみこころ」を生きることが、「主のみこころ」でした。

では、「主のみこころ」とは何なのか？

Part Three

「主のみこころ」とは何でしょうか？

もう既に、ここにいる私たちすべてに、主のみこころは提示されています。

どこに？

聖書にです。

聖書の全てに、至るところに、聖書を開きさえすれば、そこに主のみこころのすべてがあります。

「聖なる者でありなさい」、「神であるわたしに帰きなさい」、「主なる神を知りなさい」、「わたしについて来なさい。わたしに従いなさい」、「互いに愛し合いなさい、先に愛しなさい」、「互いに赦し合いなさい、先に赦しなさい」、「すべての人との平和を追い求め、出来る限り、すべての人と平和を保ちなさい」、「寛容を尽くしなさい」、「さばいてはいけません。隣人をさばくあなたはいつたい何者ですか」、「自分を知恵あるものと考えてはいけません」、「へりくだって、人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」、「一つでありなさい」、「祈りなさい」、「感謝しなさい」、「喜んでいなさい」、「御霊を消してはいけません」、「上にあるものを求めなさい。地にあるものを思ってはなりません」、「時が良

くても悪くても、みことばを宣べ伝えなさい」、「罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます」。

聖書のどこを読んでも、主のみこころだけです。

どこにあっても、どんな条件でも、どんな環境でも、どの人の前にあっても、「聖なる者でありなさい」、「神に帰りなさい」、「神を知りなさい」、「わたしについて来なさい。わたしに従いなさい」、「互いに愛し合いなさい、先に愛しなさい」、「互いに赦し合いなさい、先に赦しなさい」、「すべての人との平和を追い求め、出来る限り、すべての人と平和を保ちなさい」、「寛容を尽くしなさい」、「さばいてはいけません。隣人をさばくあなたはいったい何者ですか」、「自分を知恵あるものと考えてはいけません」、「へりくだって、人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」、「一つでありなさい」、「祈りなさい」、「感謝しなさい」、「喜んでいなさい」、「御霊を消してはいけません」、「上にあるものを求めなさい。地にあるものを思ってはなりません」、「時が良くても悪くても、みことばを宣べ伝えなさい」、「罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます」と、言います。

これらすべてが、主のみこころです。

場所や環境や条件に左右されるものではありません。

極めつけは、使徒パウロ先生の、最弱、最悪、最低とも言える奴隷の身分にある人たちに語った言葉です。

エペソ 6 : 5 - 8 (パウロ)

「奴隷制度を廃止出来るようにデモをしなさい。戦いなさい。政治活動をしなさい。権力者となって社会構造を変えなさい」とは一言も仰いません。

結果的にそうなるだろう、もっと深いところからの根こそぎの改革・廃止という実りを主が与えて下さることを期待することは二の次にして、「先ず、今の目の前にいるその人、あなたを物扱いし、あなたを使い捨てる道具のようになっているその人に、その地上の主人に真心から仕えなさい。キリストにある自由人として、奴隷であることを誠実に全うしなさい」と勧めます。

「いつの日か結果的に、根元から、根こそぎひっくり返るような改革・廃止へと繋がることもあり得るけれども、もしそうでなかったとしても、主からの報いを受けることは確実だ」と、また、「根こそぎひっくり返す方法こそが、主のみこころに従って生きることだ」と、教え諭して下さいます。

「愛すること、赦すこと、敬うこと、分けること、裁かないこと、寛容を尽

くすこと、人に目を向け怒り、歯ぎしりし、見下し、見下されることに苛立つ代わりに、信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さないこと、人の罪ではなく、自分の罪と戦って血を流すまで抵抗すること、そんな主のみこころを生きなさい」と、人にとって、人として最も大事なことを教え勧めて下さいます。

平たく言えば、「私たちには、天の御国、神の国がある」ということかなと思います。

Part Four

私たちは、よくと言っても過言ではないほどに、「私の心にあることが、主のみこころであるはずだ。いや、私の心にあることが、主のみこころだと言って下さるとありがたいし、それでこそ、祈りが聞かれたということになる」と考えてしまうことがあるように思います。

私の心を、主のみこころよりも優先させてしまう欲のようなものが確かにあると思いますが、先程のイスラエルの民たちに、神さまが、最弱、最悪、最低の条件が揃っていると一見すると思ってしまう荒野へと導いて行った理由をこう語って下さいました。

申命記 8 : 2-7、17-20 (パワポ)

「あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」

イスラエルの民たち、そして私たちの心のうちにあるものが、「主のみこころ」ではなく、主のみこころ以外のものであることを知るために、荒野へと導いて行かれました。

「私の力、私の手の力」が、結局、私たちの心を占めていることを知るために、マナを食べるかのように神の言葉を食し、それによって神のみこころを毎日知り、知ってもそのみこころを生きようとしない自分の姿を正直に認めながら、それでも神のみこころを生きることを諦めずに、あわれみと赦しと助けと恵みとへりくだりを求めながら、主のみこころを行って生きようとするところに人が生きる意義がある、キリストを信じる者の意義があると、教えて下さいます。

主のみこころを悟り、悟ったならば行おうとすることが道であり、その道に寄り添うかのように主なる神様が良い地へと、神の国へと導き入れて下さると、教えて下さいます。

その主のみこころが、モーセ五書の全てに、聖書の端から端までびっしり書かれています。

それなのに、その主のみこころには中々目が行かず、聞く耳と持たず、私の心を主に押し付けるばかりであったり、私が想像する主のみこころを、自分の中で勝手に造り上げてはいないだろうかと問われているようにも思います。

Part Five

エペソ書を書いたのは使徒パウロ先生ですが、その使徒パウロが書いたほとんどの手紙の書く動機となっているのが、キリストの群れであるはずの教会が、主のみこころではないことを大なり小なりしながら、「こういう実績がある」、「こういうことを私は懸命にしてきた、している」、「こういう結果を得ている」、「なんであの人は、なんでこの人は！」という、それぞれがそれぞれに自画自賛するような「自分の力、自分の手の力」を誇って、一つになれていない教会の姿を懸念して書かれたものです。

主のみこころよりも私の心、主のみこころよりも私がやっていることやりたいこと、主のみこころよりも私の力、主のみこころよりも私の願いや判断や裁き。

ところが、私の心よりも主のみこころ、私がやっていることやりたいことよりも主のみこころ、私の力よりも主のみこころ、私の願いや判断や裁きよりも主のみこころが、聖書のありとあらゆるそのすべてにすでに書かれております。

私自身も、「こっちなのかあっちなのか、これなのかあれなのか」ということをもって、主のみこころを問うてしまうことが少なくないように思いますが、でも、その時ごとに示される主のみこころは、「愛しなさい。赦しなさい。わたしについて来なさい。へりくだりなさい。泣きなさい。聖でありなさい。あなたが先に愛しなさい。あなたが先に赦しなさい。あなたが先に跪きなさい。あなたが先に手を広げなさい。あなたが先に自らを放棄しなさい。祈りなさい。わたしに目を向けなさい。人を愛するために、わたしから目を離してはいけません」ということです。

正直、苦しいです。辛いです。

心が疲れ、体に力が入らず、人が憎く思えてしまい、どんな顔して人前に行き、どんな顔して聖書の言葉を語れば良いのか悩み、くたびれ果てます。

自分で自分のことが、霊的詐欺師だと思ってしまうこともあります。

それでもやっぱり、そんな時、聖書を開き、主のみこころを求めますと、必ずと言っていいほど、自由が与えられます。

解放が与えられます。

その聖書の言葉が、私への神の言葉として迫って来ます。

時には、「いい、今は赦さなくていい。その時が来れば赦すし、わたしがあなたを赦せるようにする。

今は愛さなくていい。その時が来れば愛すし、わたしがあなたを愛せるようにする。

今は倒れてていい。その時が来れば、わたしがあなたを起こすから。

今は出来なくていい。その時が来れば、わたしがあなたを出来るようにするから」と、まるで、どんなに赦されないことをしてしまったとしても、どこま

でも味方でいてくれる親のようにいて下さる主なる神を、イエス様を、聖霊様を感じます。

Conclusion

それゆえに、神のみこころを悟ろうとすることは辞められません。
神のみこころを悟ろうとすることをあきらめられません。
神のみこころをなしたいと思うことを止められません。
神のみこころを行おうとすることから、引き下がるわけにはいきません。
神のみこころに従うことの幸いを忘れられません。

主のみこころを悟り続けることを辞めない、あきらめない、忘れない私たちでありたいと願います。

お祈りいたします。
祝祷：エペソ書 5：17